ぐんまの土木遺産

県土発展の礎として築かれた
土木構造物を訪ねて

(財)群馬県建設技術センター

ぐんまの土木遺産
(財)群馬県建設技術

B
445

序

明治政府は、西洋文明を熱心に導入し、社会資本の整備を図ってきました。欧米から招聘した技術者や、技術取得のため欧米へ派遣された技術者及び国内で育成された技術者によって、それまで我が国にはなかった鉄道・通信等の施設の建設が急ピッチで行われました。

大正時代には、関東大震災の災害復旧工事が行われました。昭和に入ると、第二次世界大戦によって疲弊した国土の復旧と、追い討ちをかけるように襲ったカスリン台風等による災害の復旧工事が、急ピッチで実施されました。昭和30年代後半からは、高度経済成長期に入り社会資本の基盤整備が急務となり、新しい基準による土木構造物が短期間に大量に建設された結果、明治・大正・昭和初期それぞれの技術者が、社会の要請に応えて建設し、我が国の文化と歴史を育んできた土木構造物の多くが、正当な評価を受けることなく更新されるに至ったことは、一面では戦後の経済発展を担ったという時代背景があったとはいえ、誠に残念なことであります。

このような社会情勢の中で、近年文化庁が近代化遺産の調査を行い、土木構造物が文化財行政の中で認知されるようになり、本県でも明治26年に開通した旧信越本線の“眼鏡橋”が重要文化財に指定され、長く保存されることになりました。なお、土木学会や建設省でも近代土木遺産の調査を行っております。

重要文化財の対象とならない多くの近代の土木構造物は、今なお現役として機能しておりますが、近年の産業構造や社会経済情勢の変化に伴う価値観等の多様化により、文化財的価値を有するものまで、それに相応しい評価を受けることなく、破壊・更新される可能性を秘めています。

そのような背景のもとに、群馬県土木部から、県内に“眼鏡橋”に匹敵または準じる土木構造物で土木遺産となるようなものがあるか、調査の上選定してほしいとの依頼がありました。そこで、当センターでは土木構造物等の建設に携わってこられた先輩技術者の代表者からなる「土木遺産調査研究委員会」を設置し、先輩の方々から情報提供された土木遺産の候補リストについて、文献・資料の収集や現地踏査結果等を踏まえて、構造物そのものだけではなく、当時の社会環境や時代背景及び計画の思想やそれを造る知恵や技術等の発想の原点にまで踏み込んだうえで、それぞれの時代を代表し、土木遺産に相応しいと思われる土木構造物を選定して報告書を作成しました。

建設技術センターとしての調査は、全国でも初めての事業であり、不安な点もありましたが、委員の方々等のご尽力により、本報告書を刊行することができました。

今後、社会の高度化や人口の高齢化が一層進み、真に豊かで潤いのある地域づくりが求められる中で、本報告書により近代化遺産としての土木遺産に対するご理解を深めて戴き、土木構造物が末長くその使命を果たすとともに、今後建設される新しい土木構造物にこの精神が活かされることを期待します。

終わりにあたりまして、この計画立案等に腐心していただきましたが意図半ばで他界された前委員長の番二郎氏、及びその後を引き継いでいただいた現委員長の横田博忠氏をはじめとして委員の方々、並びに様々な貴重な情報の提供等にご協力いただいた方々、さらにはこの企画を担当された（株）長大の方々に心から感謝申し上げます。

平成10年9月

（財）群馬県建設技術センター

理事長　武井　上巳

はじめに

明治以来昭和30年代末まで、われわれの先輩たちが県土発展の礎として最新の知識と多数の人の汗の結晶として築造してきた道路・橋梁・河川・砂防など数多くの土木構造物は、時代によりその内容は異なるが、今日まで長期間の風雪に耐えて県土保全や県民生活に役立っている。

この間、明治43年、昭和10年、昭和22年より3年連続した台風および昭和16年から20年までの太平洋戦争など、県民生活や県経済に与えた影響は大変大きいが、これら構造物とも深い関連があったのである。

今般、これら構造物の中から土木技術者として後世に残し語り継ぐ価値あるものを選定するにあたり、現時点でベストメンバーと思われる土木部OBを委員とし、現地調査や慎重な審議を重ねた。皆終戦後県庁に奉職し、先輩の指導のもと地下足袋、脚絆姿という出で立ちで現場監督を経験した人たちなので、これら構造物に対し何物にも換えがたい愛着を持っているのである。

土木技術も日進月歩で、先輩たちが実体がなかなか分かりにくい土と水を相手に設計・施工面で研鑽を積み、時代の先端をいく経済的で環境にマッチするよう生み出した現物を見ると、その時代をほうふつとさせ、また無言で語りかけている長い歴史を肌で感ずるのである。

願わくはこの報告書に記載した対象物が土木遺産として永く保存され、亡き先輩たちの慰霊碑となり、後輩たちの指針となることを切望する次第である。

終わりに先年意図半ばで他界した番二郎前委員長および委員各位、事務局を担当した(財)群馬県建設技術センターの職員、(株)長大の皆さんに心から感謝を申しあげる次第である。

平成10年9月

土木遺産調査研究委員会

委員長　横田　博忠

目次

序　建設技術センター　理事長挨拶

はじめに　委員長挨拶

Ⅰ.土木遺産構造物建設の背景 ……7

Ⅱ.土木遺産について ……14
1.対象構造物……14
2.対象年代……14
3.評価の視点……15

Ⅲ.土木遺産の紹介 ……17
1.道路編……18
2.橋梁編……32
3.河川編 ……120

Ⅳ.今後の土木遺産のあり方 ……216
1.土木遺産の保存・利活用方針 ……216
2.今後の課題の整理 ……222

Ⅴ.参考資料 ……224
1.調査の実施要領と経緯 ……224
2.土木遺産に関する最近の動向 ……235
3.土木遺産候補に準ずる構造物リスト ……240

◆その他
・引用・参考文献のリスト……248
・土木遺産分布図など ……12